総合討論 2

モデレーター
獨協大学国際教養学部准教授
小宮 秀陵（コミヤ・ヒデタカ）

小宮：そもそも「韓国学」は「地域学」の一分野でありますが、今回の登壇いただいた先生方は歴史学や考古学の専門家ばかりです。そこで今回、先生方が「韓国学」という枠組みや概念をどのように理解し、発表に臨んだのかを伺いたいと思います。

朴（省）：私は韓国の古代史を専攻していますが、韓国学という視点で物事を考えたことがありませんでした。ですから、今回のお題をいただいた時に、古代史から韓国学へどのようにアプローチをしようかと、悩んだものです。韓国学といえば、K-POPや韓流映画、ドラマなど現代文化が思い浮かぶ人が多いかもしれません。しかし、実際には韓国学は文化、文学、言語、哲学、民俗学など多岐にわたる分野を含みます。そして、そのすべての基盤には歴史があります。したがって私は、韓国学は歴史を中心に研究を進め、発展するのが適切だと捉えました。韓国の歴史を通じて世界の人々と普遍的な題材として考えることが重要かと思います。

李（在）：韓国学を地域学の一つとして捉えるならば、韓国の「過去」の概念が含まれます。そのため、韓国学は地域の過去、つまり歴史として定義され、その結果、地域学との結びつきが強まると考えられます。しかし一方で、韓国史とは何かと考えると、その定義は難しいものです。韓国史は国史や民俗史として広がってきましたが、その内容や範囲については多くの議論があり、特に民族史としての韓国史のあり方については、さまざまな視点から批判や意見が交わされてきました。したがって、韓国学を地域の過去として定義するには、広い歴史としてではなく、地域の過去としての韓国史として捉える必要性があると考えました。

小宮：報告のテーマにもあった、他の国や地域で生活しながら自分たちの拠り所やアイデンティティをどう形成するか。その過程で韓国学をどのように捉えるかという点に関連していますね。外国の視点から、ヤニック先生はどうお考えでしょうか？

ヤニック：外国の視点から見ると、韓国学は人文社会学の一部として捉えることができ、比較的整理しやすいように感じます。例えば、韓国に住む韓国人の政治性や、今回のテーマにもあったディアスポラといった広い概念も韓国学に含まれることになります。韓国学は多角的に考察することが可能で、世界から見る韓国学、東アジアからの視点、そして韓国自国からの視点と、グローバルな文脈においてもさまざまな角度から捉えることができます。また、地理的視点、社会的視点、文化的視点などでも議論でき得るでしょう。このように、韓国学は多様な視点や理論の進展によって深められる学問であると考えます。

キム：私も、韓国学は地域学の一部であり、人文社会学的なアプローチの中で接近できるものと捉えております。また、世界のどこで韓国学に取り組むのかということでも意味が変わってくるかと思います。例えば、韓国の国内で韓国学を学ぶのか、欧米圏で学ぶのか、東南アジアで学ぶのか。つまり中心となる地域や条件によって取り扱う課題や焦点が大きく異なり、その意義も異なってくるということです。韓国学は英語では「Korean Studies」ですが、英語のKoreanは地理的には北朝鮮も含まれており、アメリカ的な視点からすると韓国学は北朝鮮の歴史も含まれるということになります。分断の歴史も含まれますから、北朝鮮研究をしている人たちからは難しい顔をされるわけですけれども、実際にそういった論議になるんです。さらに、韓国系米国人の歴史をアメリカで研究する場合、アメリカ学に属することがあります。では、アメリカを中心にディアスポラの問題を考えた場合、米国学に含まれるのか、韓国学に含まれるのかという論争も存在し得るわけです。私自身は、韓国学をあえて定義する必要はないと考えています。テーマは膨大で有機的であり、その時その時で変化します。確実なのは、学際的な研究が迅速に進展していることで、今後その発展は間違いありません。この発展が進めば、米国学や韓国学に含まれるかどうかといった問題はあまり重要ではなくなってくるのかもしれません。

ヤニック：韓国と朝鮮という二つの地域や文化を無理に分け隔てて考えるのではなく、それぞれの歴史的背景や文化的特性を包括的に捉えるのがいいのではと、私は考えますね。

小宮：「Korean Studies」と同様に、たとえば日本の大学では「韓国語」をどう名称づけるかという問題があります。「韓国語」「朝鮮語」「韓国朝鮮語」「コリア語」「ハングル」など、さま

ざまありますが、これは単なる言葉の選択にとどまらず、それぞれが異なる文化的、歴史的背景や視点を持っているため、どのように呼ぶかによってその言語や文化の理解が大きく異なってくるのです。大学がどの名称を採用するかによって学生たちの学びにも直接影響を与えるため、慎重に検討されるべき問題です。多様性の中で受け入れていくという、キム先生、ヤニック先生のご指摘は示唆点になったと思います。

それを受けて、在朝日本人についての発表をしてくださった朴俊炯先生は、どうお考えでしょうか。

朴（俊）：私はかつて韓国学研究所という機関で働いていました。その時、韓国学とは何かという根本的な問いに悩んでいました。韓国学は韓国に関する学問で、主に韓国人が研究するものという印象がありますが、それだけでは説明できません。キム先生やヤニック先生の議論から、やはり韓国学を「どこで」行うかという点が非常に重要であると感じました。その土地の文化や歴史、社会背景を理解する必要がある。つまり、地理的要素が大きく影響する学問領域なのです。私は、韓国学を定義づけられるものではなく複数性があるものだと考えます。地域や文化、社会経済的背景など多様性を重視し、さまざまな形をとるべきものと考えています。一方で、私たちが韓国で韓国学を研究している限り、国際的な学術界の潮流に遅れを取る危険性があるのではないかという懸念も浮かび上がりました。特に、グローバルな視点で韓国学を考え続けることが必要であり、研究者としての実践力が問われる場面が増えていくと感じています。韓国学とは何かを常に考え続け、その変遷を追い続けることが、これからの課題であると考えます。

韓：私自身も、韓国学という概念は、私にとって非常に複雑ですが、ともすると、韓国国内ではあまり重視されていないようにも感じられます。それはまるでプレゼントとして受け取るお菓子のセットのようなもので、自分が受け取るときには嬉しい気持ちになりますが、蓋を開けてみると、その中には言語、文化、歴史といったさまざまな要素が詰まっていて、受け取った後にはその内容をじっくり味わう必要があります。これらの要素を学術的に分析する過程では、また新たな視点が見えてきます。しかし、私自身はまだそのすべてを消化しきれていないのが現状です。韓国学とは、こと外国というフィールドにおいて、韓国を研究する人々に非常に有益な視点を提供してくれるものだと思います。ですから、このようなフォーラムは韓国学の理解を深めるために非常に重要な役割を果たしていると感じました。特に、ディアスポラや境界といったテーマは、こうした場だからこそ取り扱うことができた問題です。こうした交流の場は日本国内だけでなく、韓国でも開催されるべきです。私たち自身が境界を崩していくことが大切だと思います。

朴（芝）：私も韓国学そのものについて、それは何なのかという疑問を持っておりますので、研究者として他の先生方に深く同意します。私は移住について研究を進めていますが、特に、百済史における移住の問題は複雑であり、現代の視点から再評価する必要があると考えています。例えば、百済に住んでいる外国人や他国に移住した百済人も、広義の百済史の中に含まれるべきだとの意見を聞いたことがあります。このような広範な視点で百済史を捉えることは、新たな発見や議論を生む可能性があり、まさに研究のしがいがある分野ではないでしょうか。以前、私が講義の中で学生たちに課したレポートの課題として「韓国史の範囲をどのように捉えるか」という問いかけを行いました。すると、学生たちからは実に多様な意見が寄せられました。彼らの文章を読む中で、異なる視点や考え方が浮かび上がり、まだまだ考えるべき部分が多いことを痛感しました。このフォーラムのような意見交換の場が開催されることは、私たち研究者にとっても、未来にとっても非常に価値のあることです。これからも積極的に意見を共有し、新たな視点を取り入れることで、より深い理解を得ていきたいと考えています。

李（炳）：韓国学フォーラムのテーマが「韓国学の新地平」であることを受けて、改めて韓国学とは何かを考えてみる機会となりました。特に過去の外国人研究者たちが韓国の国史をどのように叙述してきたかを振り返ってみると、彼らが描く韓国の姿は、時に自分たちが見たいと思う韓国のイメージが内在化されているように感じられます。これは、韓国がどのように近代化を遂げてきたのかという点に関心が集中していたためでしょう。韓国学が歴史や社会科学などさまざまな要素を包括するものであることを考慮すると、外国人研究者たちが導いてきた答えそのものが韓国学の姿だったのではないかと考えます。特に、キムジス先生の講演を通じて、現在の海外における韓国学が大きく変貌を遂げていることを強く感じました。以前の韓国学では、韓国の歴史に関して、主に年代や政治史、制度史といったテーマに議論が集中していた印象です。しかし、多様な韓国学の概念を取り入れることで新たな視点を見出し、古代史においてはどのように語ることができるのかを改めて考えるきっかけになりました。

私自身の研究においても、これまでの方法論を反省し、多様な観点や新しい方法論、さらには多様な意識を持って研究を見直す必要があると痛感しました。これは、一見すると韓国で韓国学を研究する者にとっての宿命のようにも思えますが、同時に新たな発見や知見を得る絶好の機会でもあります。韓国学を通じて、より深く韓国の歴史や社会を理解し、新たな地平を切り開くことの重要性を強く感じています。

鄭：まず、韓国学という学問を世界的な観点で捉えた場合、普遍的な形式を考えることについて責任があると強く感じました。特に外国における「研究」と「交流」の二つの側面について考えたことがあります。まず研究の面について述べますと、韓国学の研究は往々にして一直線上に繋がっている傾向があるように見受けられます。具体的な例として、K-POPカルチャー、映画、ドラマといった現代的な題材が挙げられますが、これらはしばしば一方的な視点で捉えられ、偏った研究が行われがちです。これが問題であると考えられる理由は、現代以前の韓国を対象とした研究があまり注目されていないから

です。外国で韓国学を研究している研究者の中で、特に現代以前の韓国の歴史や文化、芸術について研究している人は少ないように思います。

しかし、これらの学問領域の学びを深めるためには、現代の韓国の姿が、現代以前の伝統的な韓国の姿とどのように結びついているのかを理解することが、非常に大切なことだと考えます。現代以前の研究がより活発になることで、現代の韓国に関する研究もさらに発展する可能性があります。学生たちにも、単に現代からの韓国を見るのではなく、伝統に対しても興味を持ち、歴史的・文化的な側面からも韓国を見渡してもらいたいと思います。

キム：鄭秩根先生が指摘された点は、学問の世界において非常に意義深いものであり、賛同いたします。たしかに、海外の研究者の中で前近代を専門的に研究している学者はとても少ないです。私たちも前近代について学ぶ学生の数を増やすためにさまざまな試みを行っていますが、思うような成果を上げられていないのが現状です。その背景にあるのが言語の壁です。特に、韓国学を学ぶ際には、最初に韓国語を習得しなければならないという難関があります。この言語の習得は、単なるコミュニケーションのためではなく、歴史的な文献や資料を精緻に読み解くための基礎となります。さらに、韓国語に加えて漢文の理解も求められます。韓国の前近代史を深く理解するためには、漢文資料を読み解く能力が必須になるからです。しかし、漢文は一般的に難解であり、その習得には時間と労力を要します。このため、多くの外国人学生は、前近代の研究に興味があっても、言語の壁に阻まれ、学びを断念せざるを得ない状況が生まれています。こうした状況に対して、今後どのように支援を提供できるかを考えることは、学問の発展にとって重要です。外国人学生が漢文を学びやすい環境を作ることで、前近代の多様な視点からの研究がより広く普及し、新たな学問的発見が生まれる可能性が広がっていくと思います。

小宮：先生方からさまざまな感想や提言をいただき、学問的な課題もより一層明確になってきましたね。今回、主に前近代の研究を専門とする方々が一堂に会する機会を設けたのは、まさに意図的なものでした。前近代の研究者たちにとって、漢文の学習方法を開発・探求することは極めて重要な課題であることに間違いありません。この時代の文献や資料の多くが漢文で記されているため、適切な理解と分析が求められるからです。近年、日本の大学では韓国の歴史や文化を専門的に学ぶことができる「韓国学科」や「韓国コース」が徐々に増えてきています。これにより、韓国の歴史や文化を深く理解しようとする学生に新たな学びの場が提供されています。しかし、漢文を体系的に学ぶ機会もまた別途用意されるべきです。現実的なアプローチとしては、歴史学科などで漢文のトレーニングを受けるのが一般的な選択肢となるでしょう。韓国について学び始めてから歴史を深めるか、あるいは歴史を学んだ後に韓国についての知識を広げるか、その学びのルートは個々の志向や興味によって異なるかと思います。こうした多様な学びのルートが提供されることで、学生は自分の興味や関心に応じた学びを追求できるでしょう。

それでは、ここからは会場の皆さんからも質問を受け付けたいと思います。

質問者1：韓国仏教を専門にしております。韓国仏教は、インド仏教、中国仏教、日本仏教と比べてあまり知られておらず「中国仏教のコピーであって特徴はない」と言われることもあります。人文社会の分野においても、韓国の文化全般が中国の影響を受けていると考えられますが、韓国仏教と同じように、韓国の独自性を見出すのは難しいと感じますか？それとも、韓国学には独特の重要な要素があると感じますか？それとも、中国との関係において類似している部分としていない部分でケースバイケースでしょうか？ヤニック先生の見解をお聞きしたいです。

ヤニック：面白い質問ですね。韓国学において、確かに中国からの影響を無視することはできませんが、韓国独自の文化的背景は確かに存在しています。その一つが宗教です。韓国には過去から社会の中に宗教が存在しています。それは儒教による文化の影響が大きいと考えられます。韓国には儒教、仏教などが複雑に絡み合い、独特の文化を形成しているとも言えます。この点を考慮すると、韓国の文化や仏教には、他の国々には見られない独自の視点や価値観が存在することが分かるでしょう。

質問者2：李在晥先生にご質問です。先生の発表では接境空間（コンタクトゾーン）について言及されました。古代の歴史図においても接境空間を点で表さなければならないという内容も興味深かったです。しかしながら一方で、古代史においても「領域」という認識はあったと思います。具体的には、「私と私以外」あるいは「私と敵対するもの」という区別が、当時の人々の根本的な考え方にあったのではないでしょうか。それは例えば山脈などが一つの境界になったなども考えられます。私はそのような見解を持っていますが、先生は古代人の領域認識に対してどのような考えをお持ちでしょうか？

李（在）：古代人の領域認識については私も悩ましい問題であると考えます。おっしゃるように山脈といった地形的な境界や、または、物質文化も領域という概念に影響を与えるものであったでしょう。一方で、アフリカや中央アジアにおける研究では、物質文化の違いが必ずしも領域を区別するものではないとする見解もあります。山脈などの自然の障壁を越えても同一性や共通の文化的アイデンティティを感じ取ることはできるのです。

領域の概念は非常に多面的であり、単純に一つの要素だけで決定されるものではありません。さまざまな要素を総合的に考慮し、多角的な視点を持つことで、より深い理解が得られるのではないでしょうか。

小宮：質問してくださった方々、ありがとうございました。二日間にわたるフォーラムにおいて、各先生から非常に貴重な発表をいただきました。それぞれの発表から独自の視点や専門的な知見を提供いただき、新たな視点を与えてくださいました。またこの討論の場では、活発な意見交換が行われ、多くの示唆に富んだディスカッションを展開できました。この二日間の学びが、皆様の今後の研究や学習を広げていくための一助になれば幸いです。それでは今回の総合討論を終了とさせていただきます。ありがとうございました。